仙台藩への四天王寺流の伝播と継承について

A STUDY ON THE SHITENNOU-JI SCHOOL IN SENDAI-HAN

永井康雄*, 飯淵康一**
Yasuo NAGAI and Kouichi IIBUCHI

The aim of this study is to examine the reality and the way of succession of SHITENNOU-JI school in SENDAI-HAN. HOZAWA family was the master carpenter in SENDAI-HAN. HOZAWA Masanao was succeeded SHITENNOU-JI school by FUKAYA Harunao that was a pupil of HEINOUCI Masaharu in the Houreki period (1751-1764). HOZAWA Naoyoshi, next successor, had edited many architectural manual books and had been active as a successor of SHITENNOU-JI school. HOZAWA established the school family in SENDAI-HAN. This school family was composed of pupils called MON-JIN (門人) that come from variety range of social standings. On the other hand, the pupils called KEIKO-NIN (稽古人) had been in SENDAI-HAN. KEIKO-NIN was selected from among young carpenters by SENDAI-HAN. The succession of SHITENNOU-JI school was very strict.

Keywords : SHITENNOU-JI school, SENDAI-HAN, carpenter, Edo period

四天王寺流, 仙台藩, 大工, 江戸時代

序

江戸時代の建築界に幕府の大棟梁職にあった平内・甲良両家をそれぞれ宗家とする四天王寺・建仁寺の二大流派が存在していたのは周知の通りである。そしてこれら両流派が諸藩の大工へと伝播していった事実が存在することもよく知られるところである¹⁾。しかしながら、両流派の成立過程でさえも必ずしも十分に明らかにされているわけではなく、各々の流派の技術等が諸藩の大工へと伝播していった過程、そして諸藩の大工にとって流派を継承することの社会的意義、さらには流派の技術等の伝播が諸藩の建築技術に及ぼした影響等々を解明することは、我国の近世建築文化を理解する上で重要な課題と言えよう²⁾。

仙台藩の大工棟梁職を勤めた朴澤家は、後述のように幕府大棟梁平内政治の門弟であった深谷平左衛門治直より宝暦年中(1751-1764)に四天王寺流の皆伝を受け、その後明治に至るまで同流を継承する同藩の代表的な工匠家として存続した。この朴澤家に伝来した古文書類や絵図面類、木割書を始めとする建築技術書類の多くは「朴澤家資料」として仙台市博物館に遺されている。本稿は上述の諸問題を解明するための端緒として、これらの史料を基に、これまで殆ど知られていなかった仙台藩への四天王寺流伝播の経緯とその後の藩内での同流継承の在り方などを明らかにしようとするものである。

1. 朴澤家の系譜

図-1は朴澤家九代目庄蔵が大正12年(1923)に宮城縣土木係へ提出した「朴澤庄蔵履歴書」³⁾を基に、他の諸史料⁴⁾の内容を加えて作成した朴澤氏の家譜である。

仙台藩御抱え工匠としての朴澤家の歴史は、宮城郡根白石在字朴澤(現仙台市泉区)出身の初代甚助が寛永2年(1625)に仙台藩初代藩主伊達政宗に御大工として召し出された時に始まる。

先ず朴澤家が勤仕した役職について見ると、初代甚助は御大工、三代安右衛門は場所主立、四代十四郎は享保元年(1716)に脇棟梁及御積り職となり、享保13年(1728)からは御大工棟梁を勤めている。五代庄蔵は明和2年(1765)に御大工棟梁職を仰せ付けられ、寛政6年(1794)には御大工棟梁并吟味役仮役となっている。六代孫太郎は御積横目大工加勢、七代庄蔵は御大工絵圖方主立、八代十四郎は御大工御積横目大工加勢を勤めている。仙台藩の職制では藩主の下に奉行が置かれ、更にその下に若年寄や出入司などの要職が置かれていた。「司属部分録」⁵⁾には、出入司支配として「御作事方[同所御足輕]/一 本ノ横目御役人等/(中略)/御作事方本ノ支配/御大工木挽屋根葺/御瓦師等諸職人等/棟梁共/(中略)御細工番頭立/御用支配/御供大工/御張付/右ノ御作事方職人/(後略)」([]は割注:/は改行を示す。)が記されている。つまり御作事方本ノ等の役人は出入司の配下にあ

* 東北大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)

** 東北大学大学院工学研究科 教授・工博

Lecturer, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

① 其 甚助 (和兵衛)	② 其 和兵衛 (権九郎)	③ 其 安右衛門
寛永 2年(1625) 貞山様(伊達政宗)御時代寛永二年宮城郡根白石在字朴沼出身御大工二被召出 明暦 2年(1656)迄三拾二ヶ年奉勤仕候 進退御切米小判貳両貳歩銀參匁御扶持方三人分被下口候	明暦 2年(1656) 跡式被仰付進退御切米御扶持方從來ノ通被下口 貞享 2年(1685)迄三拾ヶ年奉勤仕候	貞享 2年(1685) 跡式被仰付場所主立相勘江戸表御用先ニ於テ病死 享保 1年(1716)迄三拾二ヶ年奉勤仕候
④ 正直 十四郎	⑤ 直好 庄蔵	
享保 1年(1716)ヨリ脇棟梁及御積リ職相勤御切米諸々御加増被成下小判四両二三人分ノ高二被下口 享保13年(1728) 苗字御免二被成下 享保13年(1728) 御大工棟梁被仰付御役料御切米小判貳両三歩御扶持方三人分被下口進退御切米取合せ小判六両三歩御扶持方六人分ノ高二被下口 寛保 1年(1741) 五月御役料ノ御扶持方三人分御切米貳両三歩御加増トシテ被下口 宝暦12年(1762) 御足輕御小人組被並刀御免二被成下 明和 2年(1765)迄五拾ヶ年奉勤仕候	延享 1年(1744) 獄為棟梁 明和 2年(1765) 依父辭世賜其遺祿、御大工棟梁直々被仰候 寛政 1年(1789) 退崇木匠格要諸篇考訂工家流徒著述致數百卷以奉進焉 寛政 3年(1791) 九月御役料御切米金三歩御加増二被下口取合せ御切米金六両三歩御扶持方六人分ノ高二永代祿トシテ被下口此直シ高六両五百六拾壹文 寛政 3年(1791) 迄棟梁職貳拾七ヶ年奉勤仕候 寛政 6年(1794) 江戸御上屋簷御普請方係御大工棟梁并吟味役被仰渡 寛政 9年(1797) 隠居願ひ(75歳)	
⑥ 直江 孫太郎	⑦ 直口 庄蔵	
寛政 3年(1791)ヨリ勤仕 文化 4年(1807) 当時、組被並御積横目大工加勢 文政 5年(1822)迄三拾二ヶ年奉勤仕候	文政 5年(1822)ヨリ勤仕 文政 9年(1826) 当時、組被並御大工絵圖方主立 文政11年(1828)迄七ヶ年奉勤仕候	
⑧ 直春 十四郎	直正 幸吉	
御作事方御職人組被御供大工阿部長左衛門弟 文政9年(1826)12月益子願ひ 文政11年(1828)ヨリ勤仕 安政 5年(1858) 当時、御足輕御小人組被並御大工當時御積横目大工加勢 万延 2年(1861) 当時、進退御切米六両三歩御扶持方六人分此直シ高六両五百六拾壹文、御大工當時御積リ横目大工加勢 文久元年(1861) 当時、御足輕御小人組被並御大工當時御積横目大工加勢 文久 2年(1862)8月病死	御積大工加勢忠吉弟、嘉永5年(1852)12月14日益子 安政5年(1858) 益子除き願ひ 文久元年(1861) 益子除き願ひ ⑨ 直義 次郎 庄蔵 直道 文久 3年(1863) 改名願ひ、組被並御大工 文久 3年(1863) 跡式被仰付 其當時六才	

図-1 朴澤氏家譜

り、棟梁以下の諸職人はこの御作事方本への支配を受けるが、御供大工は御作事方の職人でありながら職務上は御細工番頭の支配を受けるものであったことが知られる。また、仙台藩における工匠に関する役職については、上位から御大工棟梁吟味役兼役・御大工棟梁・同仮役・御積横目大工・同仮役・同加勢・脇棟梁・御供大工・主立御大工・御大工・御小屋仮大工などが存在したことが知られている⁶⁾。

次に、朴澤家の家格などについて見てみたい。四代十四郎は享保13年(1728)に苗字御免となり、更に宝暦12年(1762)には「御足輕御小人組被並刀御免」となっている。次の五代の時の家格を示す史料は見い出せないが、六代から九代までは何れも「御足輕御小人組被並」(又は単に組被並とも記す)⁷⁾であることから、四代の時に許された家格は永代のものであったと考えられる。仙台藩では藩士は門閥・平士・組士などの士分と、旗本・組被・小人・同心・足輕などの卒以下の者で凡下と総称される階級とに分けられ、職人組⁸⁾はこの凡下の中に含まれていた⁹⁾。仙台藩工匠の中には朴澤家のように「御足輕御小人組被並」(組被並)という家格を与えられた者と「御作事方御職人組被」という家格を与えられた者とが存在していた¹⁰⁾。「仙臺府諸士版籍」¹¹⁾の「御足輕御小人組以下之組御免被成下候者」の項に朴澤家六代目・孫太郎の名が記されているので、これと同家が許された「御足輕御小人組被並」(組被並)とは同一のものであることが知られる。一方、同書には「御作事方御職人組被」に該当する項目は見られず、「面々諸職人」という項目の中にこの肩書を有する御大工等が記されている¹²⁾。従って「御足輕御小人組被並」(組被並)と

「御作事方御職人組被」との間には明確な身分的差異が存在していたことが知られる。即ち、前者は諸職人階級を脱して卒身分で無役の者である「組被」並となったことを意味し、後者は職人組には属さないものの未だ職人階級にあることを示していると考えられる。このことは前出の「司属部分録」に記される支配系統が、棟梁以下の諸職人は御作事方本への支配、「御足輕御小人組被並」は御郡奉行支配¹³⁾、と両者相違していることから窺うことが出来よう。

以上より、朴澤家は四代十四郎正直以降、工匠出身者の中ではかなり上位の役職・家格であったことが知られる。

2. 朴澤家の四天王寺流皆伝

朴澤家五代庄蔵直好の墓碑¹⁴⁾には「少而受業於父十四郎其師深谷平左衛門治通先師四天王寺流江府平内政治也」の記述がある(巻末の[史料1]参照)。また、前出の「朴澤庄蔵履歴書」には朴澤家四代十四郎の項に続いて木匠道の相伝に関する記述があり、「武州江戸四天王寺流祖家公儀棟梁平内政治門弟同棟梁深谷平左衛門治直殿ヨリ相傳申受候」とされる(巻末の[史料2]参照)。そして「仙台棟梁譜」¹⁵⁾には「御大工棟梁朴沢十四郎宝暦年中公義御大工棟梁平内政治門弟二被相登程古仕候処皆傳ハ深谷平左衛門殿ヲ傳授仕候尤受領仕大隅殿ト被成下候事夫承及之事」とある。これらを総合すると、四代目十四郎正直が江戸幕府大棟梁平内政治の門弟である深谷平左衛門治直から宝暦年中(1751-64)に四天王寺流を相伝したことが明らかとなる¹⁶⁾。

前述のように朴澤家が仙台藩の工匠の中で重要な役職に就くのは

表-1 朴澤十四郎正直が従事した造営など

年代	普請場所など	役方
享保4年(1719)	青山様(四代藩主伊達綱村)御卒去御葬	御葬礼方脇棟梁
享保5年(1720)	江戸御上屋鋪	御新宅方脇棟梁
享保15年(1730)	宮床両八幡宮并末社覚照寺方丈	御普請方棟梁
享保19-20年 (1734-35)	瑞鳳殿	御再興方
寛保元年(1741)	宮床覚照寺方丈被相建御用	
寛保2年(1742)	国分準庭堂	御造営方
寛保2-3年 (1742-43)	長松院様(五代藩主伊達吉村夫人)御葬	御葬礼方
寛保3年(1743)	長松院様御雨屋	御普請方
寛保3年(1743)	雲松院様(六代藩主伊達宗村夫人)御葬	御葬礼方
寛保3年(1743)	雲松院様御雨屋	御普請方
寛延元年(1748)	大橋御懸替御用	
宝暦元-2年 (1751-52)	東叡山御手傳	御普請方 (御新初御鋤初)
宝暦6年(1756)	忠山様(六代藩主伊達宗村)御葬	御葬礼方
宝暦7年(1757)	忠山様御廟	御普請方
宝暦7年(1757)	屋形様(七代藩主重村)御入部	御入部方
宝暦10年(1760)	性善院様御屋鋪御普請	

四代目十四郎正直の代からであった。この十四郎が従事した造営については「朴澤十四郎勤功書上」¹⁷⁾によって知ることが出来る。即ち、正直が従事した主な造営は表-1に示すようなものであった。正直が四天王寺流を相伝するのは宝暦年中であるが、それ以前から既に脇棟梁や棟梁として数々の普請などを手掛けている。この中で宝暦元年(1751)から同2年(1752)にかけて行われた東叡山御手傳普請は、その他の主として国許で行われたものとは異なり幕府の普請であったという点で注目される。仙台藩六代藩主伊達宗村は宝暦元年に幕府より東叡山常憲院殿の修理と宝塔の造立を命ぜられた¹⁸⁾。「朴澤十四郎勤功書上」には「宝暦元年 一御金沓切 東叡山御手傳御普請方御新初御鋤初に付被下置候御事」「同貳年 一御金沓両 東叡山御手傳御普請方奉勤仕被下置候御事」とのみ記されるが、十四郎正直はこの普請に際して新初・鋤初の儀式を担当していることから藩を代表する工匠の一人として従事したことが知られる。このこととほぼ時を同じくして正直が四天王寺流を相伝したこととは無縁ではあるまい¹⁹⁾。周知のように江戸時代初頭の仙台藩では大崎八幡宮・瑞巖寺・仙台北城本丸大広間などの建築に際し、京都からは梅村氏を呼び寄せ、また紀州からは刑部左衛門国次、泉州からは駿河守宗次を雇うなど²⁰⁾、積極的に上方の建築文化・技術を取り入れている。上方からの建築技術の移入は元禄期(1688-1704)に至っても行われており、「仙台棟梁譜」には「一宮城塩釜 一ノ宮御造営之砌」²¹⁾元禄年中御大工棟梁松原助兵衛²²⁾同脇棟梁八九郎ト申者京都江被相登藤本丹波守殿江入門仕木工匠道皆傳仕罷下候事」との記述がある。これには「被相登」とあることから、御大工棟梁と同脇棟梁が上洛して藤本丹波守²³⁾に入門したのは藩命によるものであったことが知られる。「仙台棟梁譜」の朴澤家四天王寺流皆伝に関する記述にもこれと同様に「被相登」と記されることから、これも仙台藩成立以来行われてきた中央の先進技術を積極的に移入するという方策の一環として捉えることができ、朴澤十四郎が江戸に登ったのもやはり藩命であったと考えられる。

また一方、このことは平内家を宗家とする四天王寺流の成立時期を考える上でも興味深い。即ち上述のように元禄期(1688-1704)以前の仙台藩では京都及びその周辺の建築技術の摂取に努めたのに対し、宝暦年中(1751-64)になると江戸のものをその対象としたという点である。四天王寺流の根本的な木割書である「匠明」が現在見ら

写真-1 朴澤十四郎藤原直春門人改帳

れるような形に大成されたのが享保(1716-36)頃であること²⁴⁾を鑑みると、四天王寺流は元禄期以降に確立され、遅くとも宝暦期には当時の建築界を代表する流派として諸藩においても認められるようになっていたと言ふことになる。このように考えると、前に述べたように朴澤十四郎が宝暦12年(1762)に「御足輕御小人組拔並刀御免」という工匠としてかなり高い格式を与えられたのは、藩命によって四天王寺流を皆伝されたことがその要因の一つであったと推定することが出来る。

3. 仙台藩における朴澤一門

朴澤家が四天王寺流を皆伝された後、仙台藩内で一門を形成していたことを示すものの一つに「文政十一年八月吉日/朴澤十四郎藤原直春/門人改帳」²⁶⁾(以下「門人改帳」と略称する。写真-1)と題する史料がある。これには59人の氏名、年月日、職名及び血縁関係、地名などが記されている。表-2は、これらを氏名の記載順に整理したものである。

先ず、当史料の表紙に記される「文政十一年八月吉日」の意味について検討してみたい。朴澤家八代目を継いだ十四郎直春は、七代目朴澤庄蔵が文政9年(1826)11月14日に藩へ提出した「朴澤庄蔵養子願書」²⁶⁾によると、御作事方御職人組拔並御供大工阿部長左衛門の弟で文政9年当時26歳、「十四郎義職目之儀者右庄蔵弟子二而細工稽古仕罷在申者二御座候」とあるように七代目庄蔵の弟子であった。また、前出の九代目庄蔵の「朴澤庄蔵履歴書」には「八代 朴澤十四郎 文政十一年ヨリ文久三年迄三拾五ヶ年奉勤仕候」とあり、さらに「朴澤十四郎直春」と名乗るのは文政11年(1828)7月以降である²⁷⁾。従って「門人改帳」の表紙に記される文政11年(1828)8月の意味は、十四郎が家督を継いだ時か或いはその直後のことと考えられる。

次に「門人改帳」に記載される人名に付された年月日について見てみたい。中嶋丈助から甚吉までは年月日が記されていないが、それ以降は安政6年5月7日の幸吉と安政7年10月の松原幸八の順が入れ替わっている以外、全て年月日順に記されている。年月日が記されない阿部長左衛門については、文化4年(1807)7月28日付の「阿部左吉跡式願書」²⁸⁾に「長左衛門儀(中略)組拔並御積横目大工加勢朴澤孫太郎弟子二相附職目指圖稽古茂仕居候者二御座候」とあるので、文化4年当時は十四郎直春の祖父孫太郎直壽の弟子であったことが知

表-2 朴澤十四郎直春の門人

氏名	年 月 日	役職など	地名	備 考
中嶋丈助				
選十郎		御大工		
阿部長左衛門				文政9年当時:組技御供大工 安政5年当時:御積横目大工加勢
菅野多利奈				天保9年当時:千田理兵衛組
志賀忠治				
金右衛門		御大工		
忠三郎		御大工八平治弟		
甚吉			一ノ関	
卯右衛門	天保 3年(1832)11月	昼刺		
八十吉	天保 4年(1833)11月	御大工		
和助	天保 4年(1833)11月	御大工翠作倅		
鈴木勘十郎	天保 4年(1833)11月		涌谷	
竹中甚蔵	天保 5年(1834) 6月 7日		涌谷	
志賀忠兵衛	天保 5年(1834) 6月22日			安政5年当時:御大工棟梁 幕末:組技並御大工棟梁・組頭
山内眞三郎	天保 6年(1835) 8月 7日			
巖之丞	天保 6年(1835) 8月 7日	御大工		
新十郎	天保 6年(1835) 8月 7日	御大工		
菅野勇右衛門	天保 7年(1836) 1月 5日			
廣治	天保 7年(1836) 1月15日	御小屋飯大工		
浅川善左衛門	天保 7年(1836) 1月15日			天保9年当時:千田理兵衛組
金蔵	天保 7年(1836) 1月15日	御大工喜十郎弟子		
萬蔵門	天保13年(1842)11月	御供大工		
善八	天保13年(1842)11月	萬蔵門倅		
茂平	天保14年(1843) 2月	御大工		
今野良吉	天保14年(1843) 2月			天保9年当時:千田理兵衛組
平治	天保14年(1843)11月	御小羽屋根替		
郷古九蔵	弘化 2年(1845) 8月	御壁塗		
飯野新五郎	弘化 2年(1845)10月12日			幕末:鳥山安兵衛組
中村久之助	弘化 2年(1845)10月12日			
菅野六平	弘化 3年(1846) 1月19日			万延元年当時:千田理兵衛組 幕末:山内甚太夫組
飯野廣吉	弘化 3年(1846) 2月 1日			
山内彦五郎	弘化3年(1846)閏5月15日	甚三郎倅		
眞之助	弘化 4年(1847) 2月23日	御大工		
今野治助	弘化 4年(1847) 2月24日			幕末:組技並御大工
勇吉	弘化 4年(1847) 5月 8日	御小屋飯大工		
柴岡進	弘化 4年(1847) 6月 1日		涌谷	
阿部長太郎	嘉永 4年(1851) 5月			阿部長左衛門嫡子
朴澤七五郎	嘉永 4年(1851) 5月			安政5年当時:御大工 幕末:御積横目大工加勢浅川武蔵組
巖右衛門	嘉永 4年(1851) 6月			
今野市郎兵衛	嘉永 4年(1851) 6月			
石田平三郎	嘉永 4年(1851)10月18日			
坂野久兵衛	嘉永 5年(1852) 2月 1日			
後巖定吉	嘉永 5年(1852) 2月13日			幕末:浅川武蔵組
久治	嘉永 5年(1852) 2月13日	町大工		
阿部幸四郎	嘉永 5年(1852)10月27日			
六之助	嘉永 6年(1853)11月23日	御小屋飯大工		
鈴木要三郎	嘉永 7年(1854) 3月20日			
清之助	嘉永 7年(1854)10月15日	鳥岡町清太郎倅町大工		
鈴木伊八郎	嘉永 7年(1854)11月16日			幕末:阿部幸太夫組
竹中平治	安政 2年(1855) 7月11日			
茂右衛門	安政 2年(1855)10月 5日	御刺物大工		
大蔵	安政 2年(1855)10月 5日	御小屋飯大工		
徳五郎	安政 2年(1855)10月 5日	町大工		
松治郎	安政 2年(1855)10月 5日	町大工		
兵三郎	安政 3年(1856) 9月 5日	御大工茂兵衛二男		
三蔵	安政 5年(1858) 6月 8日	御大工		
幸吉	安政 6年(1859) 5月 7日	御大工		
松原幸八	安政 5年(1858)10月			幕末:阿部幸太夫組
松原助五郎	安政 7年(1860) 2月 7日			

られる。この他の年月日が記されない者については不詳であるが、年月日が記される者についてみると、役職の上位下位や或いは職種の違いと「門人改帳」における記載順序との間には関係が認められない。従って「門人改帳」に記される年月日は十四郎直春の門下となった年月日であり、これが記されない者は十四郎直春の先代或いは先々代の時に朴澤氏の門下となった者と推されよう。つまり「門人改帳」は入門の順に氏名を記したと考えられるのである。

記された地名についても考えてみよう。「門人改帳」に記載される人名の内、1名には「一ノ関」、3名には「涌谷」と付記される。藩政期の一関には田村氏を領主とする仙台藩の支藩である一関藩が置かれ、

涌谷には仙台藩主伊達家の一門である伊達安芸の要害が置かれていた²⁹⁾。「門人改帳」に涌谷の地名と共に記される鈴木勘十郎については、その素性を考える上で手掛かりとなる史料が若干残されている。即ち、寛文13年(1673)の伊達安芸宗重廟棟札に「奥州遠田郡涌谷住棟梁鈴木氏実昌」「とうりやう鈴木長右衛門」、元禄10年(1697)の妙見宮拝殿矢板及び棟札にそれぞれ「奥州遠田郡涌谷住棟梁鈴木氏直昌」「棟梁鈴木勘十郎直昌」、正徳元年(1711)の伊達安芸宗重廟屋根替棟札に「奥州遠田郡涌谷住棟梁鈴木長右衛門直昌四代」と記されているのである³⁰⁾。これらを総合すると、涌谷には代々の通称を長右衛門又は勘十郎とする鈴木姓の棟梁家が存在し、この家系は

正徳年中には既に四代を数えていたことになる。「門人改帳」に記される涌谷の鈴木勘十郎は、地名、姓、通称から鑑みてこの棟梁家の子孫或いは一族の一人と考えられよう。従って、「門人改帳」に記される「一ノ関」「涌谷」の地名は、それぞれ支藩或いは要害拝領者の支配下にあった大工、或いは居住地を示していると思われる。

さて、十四郎直春の門人の役職には御供大工・御大工・御小屋仮大工・町大工があり、各階層に跨っていたことが知られる。また職種も、大工の他に畳刺・御小羽屋根葺・御壁塗・御刺物大工と多岐に渡る。門人達が所属していた大工組について、入門当時の所属組が知られるのは現在のところ今野良吉(棟梁千田理兵衛組)のみである⁶⁾が、幕末期³¹⁾には飯野新五郎は棟梁亀山安兵衛組、菅野六平は棟梁山内甚太夫組、朴澤七五郎と後藤定吉は棟梁浅川武蔵組、鈴木伊八郎と松原幸八は棟梁阿部幸太夫組にそれぞれ属している。つまり門人達は所属組の別なく入門していたことが知られる。

この様に朴澤家が一門を形成するようになった時期は、前に触れたように文化4年(1807)には六代目孫太郎直壽が阿部長左衛門を弟子としているので、遅くともそれ以前のことと考えられよう。

4. 仙台藩における稽古人制度

仙台藩において四天王寺流の継承がどの様になされていたのかを窺うことが出来る史料に「御積横目大工加勢阿部長左衛門・御路地佐久間慶蔵願書」³²⁾と呼ばれるものがある。これは控えであり、同じ内容のものが2通残されている。1通は前半と後半が欠如しており、もう1通も前半が欠如しているが、相互を照会することによってほぼ内容が把握できる(巻末の[史料3]参照)。奥付は「壬八月廿九日」で年号は記されていないが、内容から朴澤家八代目十四郎直春の死後間もなく記されたものである。これは文久2年(1862)閏8月29日であることが知られる。史料内容の概略は以下のようなものである。安政5年(1858)に御積横目大工の千田左五郎と亀山小太郎並びに朴澤十四郎直春の三人に稽古人が付けられた。直春の稽古人は御大工棟梁志賀忠兵衛の嫡子庄三郎、御大工朴澤七五郎、御積横目大工加勢阿部長左衛門の嫡子長太郎であった。この三人の稽古人の内、阿部長太郎は文久2年(1862)正月に病死したが、志賀庄三郎と朴澤七五郎は直春から木匠道の皆伝を受けた。ところが直春は文久2年(1862)8月に病死してしまった。直春の死後、朴澤家に伝来する多くの書巻絵図等が紛失することを防ぐため、千田左五郎と亀山小太郎がこれらに印符をした。志賀庄三郎と朴澤七五郎は直春から木匠道の皆伝を受けたものの、未だ大造(大作)の書巻絵図等の筆写迄は済んでいなかった。両名はこれらを筆写したい旨を阿部長左衛門等に申し出た。これを受けて幼少の朴澤家当主に代わって親類である阿部長左衛門等が筆写許可を願い出た、というものである。

先ず、直春に付けられた三人の稽古人について見てみたい。前出の「門人改帳」には志賀庄三郎の名は記されていないが、朴澤七五郎と阿部長太郎の両人は直春の稽古人となる以前の嘉永4年(1851)5月には既に直春の門人になっている。従って稽古人と門人とは異なるものであったことが知られ、前者は「從御上被相附」とあることから藩命による公的な木匠道の継承候補者であり、これに対して後者はいわば私的な弟子と解されよう。これに関連して仙台藩の御作事方棟梁を勤めた米野善吉安代の墓誌³³⁾には「安代者番匠也依命属朴澤直好而得四天王寺流神社佛殿七堂伽藍準繩城郭宮室樓櫓諸器規矩曲

図-2 仙台藩における四天王寺流の系譜

尺傳方神道祭禮行事極秘矣(中略)天保六年蒙命附属番匠朴澤十四郎直春米野喜惣治安有千田左五郎為利亀山小太郎規繩四人為木工職稽古人天保七年所傳之極秘悉傳日人官賜金千疋賞其勞(後略)」とあり、天保6年(1835)に米野善吉に付けられた四名の稽古人もやはり「命」によるものであった。また米野善吉は「命」によって朴澤直好に属して四天王寺流の極秘を得たとあるが、朴澤直好の墓碑には「(前略)寛政三年辛亥蒙命附属番匠三人蓋於我邦内建工家師弟者起干此矣(後略)」とあることから、「命」によって直好に付いた三人の番匠の内の一人が米野善吉であったと推されると同時に、この「命」による稽古人の濫觴は寛政3年(1791)であったことが知られるのである(図-2)。なお、稽古人の存在は御作事方御職人組抜御大工で永々諸色彫刻唐彩色兼職平榮三郎の「勤書」³⁴⁾からも知られる。即ち「同(天

保)十年所々御修復方相勤候処拙者方江従 上諸色彫刻唐彩色之稽古人六人弟子二被相附難有仕合奉存候」とあり、木匠職以外の諸色彫刻唐彩色を専門とする工匠にも稽古人の制度が存在しており、藩命によって稽古人を付けられることは名誉なことであった。

さて、朴澤七五郎と阿部長太郎は直春の門人になって7～8年経過した後に稽古人となっており、前者は「御大工」と記されていることから既に一人前の工匠であったと推される。また、米野安代の稽古人となった朴澤直春は前述のように朴澤家七代庄蔵の養子になる26歳頃まで庄蔵の弟子として細工稽古をしており、稽古人になる以前から既に門人を採っていた。これらのことから稽古人は或る程度の技術的水準に達した藩工匠の中から選ばれていたと考えられ、このことは、寛政3年(1791)に朴澤直好に付けられた3人の稽古人は同9年(1797)に、天保6年(1835)に米野安代に付けられた4人の稽古人は翌年に、安政5年(1858)に朴澤直春に付けられた2人の稽古人は遅くとも文久2年(1862)8月以前に、というように比較的短期間の内に皆伝されていることから首肯できよう。現在のところ、稽古人達が如何なる研鑽を積んだかという点について全貌を詳細に知ることは出来ない。しかしながら朴澤直春の稽古人達の例を見ると、師家に伝わる書巻絵図類の筆写がその重要な任務の一つであったことは知られる。これらの書巻絵図類が木匠道継承にあたって如何に重要視されていたかは、朴澤直春の死後直ちに同家に伝来する多くの書巻絵図等に印符され、しかも直春から皆伝を受けた稽古人は勿論のこと、朴澤家の親類でさえも勝手にこれを開符する事が出来なかったことなどから窺える。これらの維持管理は単に一工匠家のみによってではなく、藩によっても厳格に行われていた。これら書巻絵図類の筆写は稽古人などの限られた者にのみ許されていたのである。

結

本稿では、仙台藩の代表的な工匠家の一つであった朴澤家に遺された史料を基にして、江戸幕府(中央)の建築技術である四天王寺流が同藩(地方)へ伝播していく経緯とその後の藩内での流派継承の在り方などについて明らかにした。以下にその要約を示す。

1) 仙台藩では、藩草創期以来元禄期(1688-1704)頃まで京都や紀州・泉州などの上方から建築文化や技術を積極的に導入していたが、宝暦期(1751-64)に至り江戸のもの、即ち四天王寺流の導入を図った。四天王寺流の根本木割書である「匠明」が現在のような形に大成されたのが享保期(1716-36)であることを併せ鑑み、同流は元禄期以降に確立されて遅くとも宝暦期には当時の建築界を代表する流派の一つとして諸藩にも認識されるようになったと考えられる。

2) 仙台藩への四天王寺流導入にあたり、中心的な役割を果たしたのは同藩の御大工棟梁職にあった朴澤十四郎正直であった。正直は藩命によって江戸に登り、幕府大棟梁平内政治の門弟深谷平左衛門治直より宝暦年中(1751-64)に四天王寺流の皆伝を受けた。正直は四天王寺流を相伝した後、「御足輕御小人組拔並刀御免」という工匠としてはかなり高い格式を与えられた。

3) 仙台藩に於ける木匠道継承の在り方の一つとして、幕末期に朴澤十四郎直春が総勢59人もの門人を擁した例に見られるように、家格・役職・大工組・職種などを問わず広く藩内から弟子を採る方法があった。また、これとは別に技術的に或る程度の水準に達した藩工匠の中から稽古人と呼ばれる木匠道継承の候補者を養成する制度

があった。門人がいわば私的な弟子と考えられるのに対して、稽古人は藩命によって定められた公的なものであった。この稽古人の濫觴は、寛政3年(1791)に藩命によって朴澤庄蔵直好に3人の番匠が付けられた時である。

4) 木匠道の継承に於いて、朴澤家に伝来した建築技術書類は重要な意味を持っていた。これらの筆写は稽古人などの限られた者にのみ許されていた。また、朴澤家に伝来したそれらの建築技術書類の維持・管理は単に朴澤家のみならず、藩によっても厳格になされていた。

謝辞

史料の閲覧・収集に際して仙台市博物館の御協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

註

- 1) 例えば、加賀藩においては建仁寺流や四天王寺流を唱える工匠が存在したことが知られている。
- 2) 内藤昌「『匠明』祖本:『諸記集』について—一流派成立の一考察」(日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和50年)や中川武「『匠明』と『諸記集』について」(同前, 昭和53年)などの論考に見られるように、四天王寺流の根本的な木割書である「匠明」の成立過程やその時期についても諸説があった。「匠明」5巻の内、「社記集」に関しては永井康雄・飯淵康一「『匠明・社記集』の成立過程について」(日本建築学会計画系論文集, 第487号, 1996年)で明らかにしている。また、四天王寺流の平内家や建仁寺流の甲良家の家譜及び業績については、田邊泰「江戸幕府作事方職制に就て」(建築雑誌第598号, 昭和10年)、田邊泰「江戸幕府大棟梁甲良氏に就て」(建築雑誌第609号, 昭和11年)に詳しく、近年では内藤昌「近世大工の美学 環境倫理としての日本古典建築学」(中央公論社, 1997年)などがある。加賀藩における建仁寺流大工については、田中徳榮「加賀藩大工の研究—主として建仁寺流大工山上家について—」(昭和55年度科学研究費補助金奨励研究(B)報告書)に詳しい。
- 3) 「朴沢家資料」, 仙台市博物館蔵。
- 4) 「朴沢家資料」では、次のものを用いた。①「御名乗ノ事」寛保2年(1742)、②「御名乗ノ事」宝暦13年(1763)、③「朴澤庄蔵隠居願」寛政9年(1797)、④「阿部左吉跡式願書」文化4年(1807)、⑤「朴澤庄蔵養子願書」文政9年(1826)、⑥「御名乗ノ事」文政11年(1828)、⑦「朴澤十四郎養子除キ願書」安政5年(1858)、⑧「朴澤十四郎一季書上」万延2年(1861)、⑨「朴澤十四郎養子除キ願書」文久元年(1861)、⑩「御積横目大工加勢阿部長左衛門・御路地佐久間慶蔵願書」文久2年(1862)、⑪「朴澤庄蔵改名願書」文久3年(1863)、⑫「御名乗ノ事」文久3年(1863)。この他に、⑬「朴澤庄蔵直好先生の墓碑」(「宮城縣史」17(金石志), 昭和31年, 宮城縣)を参考にした。
- 5) 「仙臺市史8 資料篇1」(仙臺市役所, 昭和28年)所収。
- 6) 小山祐司「江戸時代末期における仙台藩御大工と御大工大工組について—千田家文書を中心として—」(東北工業大学紀要Ⅰ:理工学編第13号, 1993年)。
- 7) 例えば、六代目孫太郎が「組拔並」(註4)の④)、七代目庄蔵が「組拔並」(同⑤)、八代目十四郎が「御足輕御小人組拔並」(同⑦⑨)九代目庄蔵が「組拔並」(同⑪)などである。
- 8) 註6)論文によると、幕末期の仙台藩には5組の大工組が存在し、各組にはそれぞれ45人前後の御大工が属していた。
- 9) 「仙臺昔話 電狸翁夜話(復刻版)」(小西利兵衛編集, 今野印刷株式会社, 平成2年)。
- 10) 例えば、註4)の⑤)の差出人である朴沢庄蔵・阿部長右衛門・朴沢養吉・佐藤太右衛門の肩書きは、それぞれ「組拔並御絵圖方主立」(本文中では「組拔並御大工御絵圖方主立」とある)・「御作事方御職人組拔御供大工」・「右庄蔵親類 御大工脇棟梁役」・「右長右衛門親類 御旗元足輕」である。
- 11) 原本は宮城県図書館所蔵。「仙臺叢書 第六卷」(仙臺叢書刊行會, 大正13年)所収。

- 12) この項目には21人の氏名と進退・職名等が記されており、この中に「御作事方職人組抜御大工」「同(御作事方職人組抜)御張付」と記される者が含まれている。この他、作事方に関する項目には「御作事方職人」「御作事方職人大工」がある。前者は「人数四百参拾七人」と個人名を記さない。後者には10人の個人名とそれぞれの知行高を記しているが、何れの人名にも「組抜並」などの肩書は記されていない。
- 13) 「御郡奉行支配/御大官/在郷御番外/同御給主/同御足輕/内組頭床頭有/御足輕御小人組抜並/龍ヶ崎御足輕/内組頭有」とある。
- 14) 註4)の⑬。
- 15) 宮城県図書館蔵。
- 16) 太田博太郎監修・伊藤要太郎解説「匠明・匠明五巻考」(鹿島出版会、昭和46年)には平内家第十一代目但馬政徳が慶応4年(1868)に記した平内家由緒書の写しが載せられている。これによると三代目大隅政治は天和3年(1683)跡式・享保元年(1716)病死、四代目七郎左門信直は同年跡式・同12年(1727)病死、五代目長門政長は同年跡式・安永3年(1774)病死している。朴澤家が四天王寺流を皆伝された宝暦年中(1751-64)の平内家当主は政長ということになる。しかしながら、東京大学所蔵の平内家旧蔵書の中には「元文4年(1739)戊未四月吉日武州江戸四天王寺流本家之巧匠平内政治門弟深谷平太夫治直圖定傳者也」という奥書を有するものが何点も存在している(例えば「社類建地割」「佛殿建地割」など)。従って朴澤十四郎は平内政治の門弟であった深谷治直の門弟になって皆伝も同人から受けたのであったが、「仙台棟梁譜」では朴澤十四郎は平内政治の門弟になり皆伝は深谷治直から受けたと解釈したものと考えられる。
- 17) 「朴沢家資料」、仙台市博物館蔵。年未詳12月。朴澤十四郎が勤仕した主な普請場所、藩主への御目見、褒美、御答について書き上げたものの控え。
- 18) 「徳川實紀」宝暦元年(1751)6月29日条。
- 19) 庄内藩の大工棟梁職を勤めた小林家には慶安4年(1651)の奥書を有する「匠明・社記集」の写本が伝来した。庄内藩は慶安度江戸城西之丸の御手伝普請を行っており、小林家旧蔵史料の中にもこれに関するものが残されていることなどから、同家はこの普請に従事する中で「匠明・社記集」を筆写する機会を得たものと考えられる。註2) 拙稿参照。
- 20) 横山秀哉「伊達家御大工梅村日向考」(日本建築学会研究報告、第42号、昭和33年6月)。
- 21) 現社殿は四代藩主伊達綱村が元禄8年(1695)に着工し、五代藩主伊達吉村の宝永元年(1704)に落成したものである。
- 22) 「仙台棟梁譜」によると松原助兵衛は本名を重成といい、「伊達治家記録」元禄8年(1695)2月条からは隠匿ヶ岡釈迦堂(仙台市宮城野区)建立時の大工棟梁であったことが知られる。
- 23) 谷直樹「中井家大工支配の研究」(思文閣出版、平成4年)に元禄5年(1692)当時の中井家配下棟梁衆が一覧表として纏められている。これに記される4人の頭棟梁の中に法隆寺大工出身として藤本丹波の名が見られる。
- 24) 註16) 伊藤要太郎著書、及び註2) 拙稿。
- 25) 「朴沢家資料」、仙台市博物館蔵。
- 26) 註4)の⑤。
- 27) 註4)の⑥。日付は「文政一十戊子年七月吉日」である。
- 28) 註4)の④。文化4年6月6日に御作事方御職人組抜御大工阿部左吉が死去し、その跡式(御切米四両御扶持方五人分)を嫡子御小屋飯大工長右衛門に下置かれるよう、御旗元足輕佐藤兵左衛門と組抜並御積横目大工加勢朴澤孫太郎が連名で差し出したものの控え。
- 29) 仙台藩の上層藩士である門閥は、格式によって一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出に分けられていた。この中には城に準じる軍事上の重要施設であり、その補修に際しては幕府への届け出が必要とされた要害を藩主から拝領した者もあった。
- 30) 「蒲谷町史」(昭和40年)所収。
- 31) 「大年寺造営扣」斎藤報恩会蔵。
- 32) 註4)の⑩。
- 33) 「米野善吉安代墓誌」(宮城県史17(金石志)、宮城県、昭和31年)所収。
- 34) 原本は斎藤報恩会蔵。なお、この写本は宮城県図書館に所蔵されている。

【史料1】朴澤庄蔵直好の墓碑(部分)

(「宮城県史17(金石志)」(宮城県、昭和31年)所収)

朴澤氏俗名庄蔵藤原直好自父世壽禄次干下土工匠家也少而受業於父十四郎其師深谷平左衛門治通先師四天王寺流江府平内政治也後以同流佐々木勘助為師(中略)於神社佛殿七堂伽藍準繩城郭宮室樓櫓諸器規矩矣(中略)神學漢學兵學釈教曲藝所關工家問其梗概編為造営之一助也(中略)寛政元年己酉温崇木匠枢要諸籍考訂工家流徒著述数百卷書以奉進焉三年辛亥蒙命属番匠三人蓋於我邦内建工家師弟者起干此矣(後略)

【史料2】朴澤庄蔵履歷書(部分)

(前略)

一四代 朴澤十四郎

享保元年ヨリ脇棟梁及御積リ職相勤御切米漸々御加増被成下小判四両二三人分ノ高二被下置享保十三年苗字御免二被成下同年御大工棟梁被仰付御役料御切米小判貳両三步御扶持方三人分被下置進退御切米取合せ小判六両三步御扶持方六人分ノ高二被下置寛保元年五月御役料ノ御扶持方三人分御切米貳両三步御加増トシテ被下置宝暦十二年御足輕御小人組抜並刀御免二被成下享保元年ヨリ明和二年迄五拾ヶ年奉勤仕候

一木匠道ハ木匠家大祖神 神代手置帆負 彦狭知ノ二神二候処漸々傳來相成武州江戸四天王寺流祖家公儀棟梁平内政治門弟同棟梁深谷平左門治直殿ヨリ相傳申受候

一唯一神道祭禮行事式ハ仙臺藩國學士佐藤左内殿へ入門仕神社造営鳥井一社社之由來祭禮行事式等其職ニ関シ候分洩ナク相傳申受候得共御許可之儀ハ佐藤左内自身ニ取扱兼候二付京都ヨリ表向相傳申受候事ハ過分ノ入費相掛リ候二付寛保年中京都野々宮様御家司津川隼人正殿へ左内殿ヨリ御頼ミ登都野々宮様へ御披露相成御家司人ヨリ手続ヲ経テ御許可状被下置候(中略)

一天文諸器ノ儀ハ藤彦大郎殿ヨリ天象測器之曲尺合其外旧尺或ハ日月星辰之運行赤道南北兩極之配等傳法相濟候

一兵學ハ甲州信玄流飯田喜市殿ヨリ陣屋備郭太守殿主櫓等之繩張建方等其外器物之寸法等相傳申受候

一茶道ハ石州流座敷圍寸法等清水道簡左殿ヨリ相傳申受候

一禮方ハ和田平助殿ヨリ小笠原流産屋并婚禮御厨子黒棚器物等之掙方相傳申受候

一五代 朴澤庄蔵

御大工棟梁直々被仰候御役料御切米金三步取合せ金六両三步御扶持方六人分二被成下寛政三年九月御役料御切米金三步御加増二被下置取合せ御切米金六両三步御扶持方六人分ノ高二永代禄トシテ被下置此直シ高六貫五百六拾壹文明和二年ヨリ寛政三年迄棟梁職貳拾七ヶ年奉勤仕候

(後略)

【史料3】御積横目大工加勢阿部長左衛門・御路地佐久間慶蔵願書

(破損) 中御積横目大工千田左五郎同亀山小太郎右三人之方江安政五年何月中木匠道稽古人從御上被相附候処右十四郎手前江御大工棟梁志賀忠兵衛嫡子同苗庄三郎并御大工朴澤七五郎御積横目大工加勢阿部長左衛門嫡子同苗長太郎右三人被相附稽古罷在候処右長太郎義當正月病死仕候義二在之右庄三郎七五郎等式人者開傳相濟候通二御座候処右十四郎當八月中病死仕候二付右木匠道朴澤家傳來に付粉乱不仕様拙者共立懸夫々取始末仕置候処其後右左五郎小太郎等被相越木匠道傳來数多之書卷等江印符仕差置候処朴澤家之始末迄他家之者被相越右様印符等仕候も不相分事口奉存候得とも夫口二仕置候後二御座候然二右稽古人庄三郎七五郎等開傳者相濟居候得共木匠道之書卷絵圖等大造之儀二在之写方迄八行届兼罷在候間写方仕度段拙者共手前江申聞無余儀訳二有之候併前文之通左五郎等印符付指置候儀二而拙者共とても勝手開符可仕様無御座候間御指圖之上開符仕右庄三郎等江相渡写方為被仕度奉存候間早速御吟味御指圖被成下度右口次郎當時幼少二而罷在拙者共儀依親類此段相達申候以上

(文久2年) 御積横目大工加勢
阿部長左衛門
御路地
佐久間慶蔵

(1999年4月10日原稿受理、1999年12月6日採用決定)